

TC68 Magnetic Alloys and Steels

IEC/TC68 国内委員会

委員長 藪本 政男

- 1979 年から IEC/TC68 会議に代表を派遣

磁性材料に関しては、当初、TC14（電力用変圧器）のもとに、SC14A（磁性鋼）を設けて規格の審議を行っていたが、1971 年、新たに TC68（磁性合金および磁性鋼）として独立した。TC68 のもとに、当初、材料、測定法及び用語に関する 3 つの WG が設けられたが、その後高透磁率材料及び永久磁石材料に分かれて計 5 つの WG となり、TC51（磁性部品及びフェライト）及び ISO/TC17（鋼）と連絡をとりつつ活動し、現在に至っている。

JWG（IEC/TC68/WG1-ISO/TC17/WG16）：電磁鋼板材料規格

WG1：磁性材料規格

WG2：材料試験方法

WG3：用語

WG4：軟質磁性合金

WG5：硬質磁性材料

日本はこの分野において古くより世界最高のレベルにあり、1979 年、コペンハーゲン会議に出席して以来、隔年に開催される Plenary meeting 及びその間に開催される WG に、Delegation を毎回派遣し、日本提案の規格化活動を行うなど積極的に審議に参加してきた。1986 年には、TC68 の Plenary meeting を東京で開催した。

- 各 WG で日本から積極的な提案活動

現在、日本は TC68 関係の JWG（電磁鋼板）、WG1（磁性材料規格）、WG2（材料試験方法）、WG4（軟質磁性合金）、WG5（硬質磁性材料）に参画して活動しており、これらの WG で日本から積極的に規格提案を行い審議を進めている。

WG において日本と欧州委員との間でしばしば大きな論争を展開してきた。1980 年代後半では単板磁気測定法について日本提案の H-coil 法と欧州勢の押す励磁電流法で長い論争を行った。結果としては精度よりも再現性を優先する考えから励磁電流法が規格化されたが、近年の電磁解析技術の発達により精度の高い測定法の必要性が出てきて、再度 H-coil 法の規格化提案を進めつつあるとしている。論陣を交代しながらも四半世紀にもおよぶ論争を粘り強く続けている。

- 1998 年 9 月より WG5 で日本がコンビナ

日本の永久磁石の研究開発レベル、量産技術力、生産高いずれも世界のトップであり、世界的にも認知されている。ところが IEC 規格に関する限り日本の寄与は当時極めて低調だったといわざるをえなかった。1996 年に WG5（硬質磁性材料）に日本から初参加、翌年から WG のコンビナを強く委嘱され、1998 年 9 月より TC68/WG5 コンビナに就任し、永久磁石規格への積極的提案を推進してきた。

以上